

---

# 職業、魔王!?

狐丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

職業、魔王！？

### 【Nコード】

N3854I

### 【作者名】

狐丸

### 【あらすじ】

不思議な夢を見るようになって数日後、突然両親が帰宅！

そこで告げられる奇想天外な事実と己の未来！

送りこまれた世界で魔王となり世界を平定せよ！  
手段は問わない！

## 序章・夢（前書き）

はじめましてm(\_\_\_\_\_)m

この度、投稿させていただきます狐丸と申します。

なにぶん今回が初投稿でして、

表現の仕方等おかしいところが多々あると思います。

そういうところは随時、コメント等で『ここはこういう言い回しの方が良い』とでも教えて戴ければその後には生かしていきますので、  
気兼ねなくコメントして戴ければ幸いですm(\_\_\_\_\_)m

## 序章：夢

俺は少し前からおかしな夢を見るようになった。

その夢は、ふと気がつくと舟の上にいる夢…

…それは大きくも小さくもなく、人が5、6人乗れるほどの舟…

…その上にポツンと一人…

…舟はぼんやりとした霧の中をゆっくりと進んでゆく…

…いったいどこへ向かっているのか、いつ到着するのかも分からな  
い…

…ただただゆっくりと進んでゆく…

…そのうち、舟から少し離れた両側に、岸が見えてくる…

…そこでようやく俺は、舟が川を下っているのだと知る…

…しかし、舟にはオールも何もないため岸によせることも出来ない…

…ぼんやり、霞の向こうの岸に咲く花を見つめる…

…ふと俺を呼ぶ声が聞こえた気がして、花から顔を上げる。  
しかし、3〜4メートル先の岸でも霞んで見えるのに、そう遠くま  
で見えるはずもない。

再び、しかし今度ははつきりと声が聞こえ、霧の向こうへ目を凝らす。

その後、

サツと霧が晴れ、目の前に光が溢れる。

あまりの眩しさに思わず、目を閉じた。

そして、瞼を閉じる瞬間に見えた2つの人影……

あれは……

父さんと母さん!?

## 一章 壱：親（前書き）

どうも狐丸です。

前章は、たくさんの方のアクセスありがとうございました  
なんだかやる気がフツフツと沸いてまいりました。

そして今回、

第一章を書かせていただきまして改めて気づいたことがあります。

それは、自分で書いておいてあれなんですが  
すぐく読みにくい（；；；）

どうにかして改善したいと思っておりますが  
そう簡単にはいかなさそうです・・・

もう少し一文一文を短くすればいいのかな？

それでは

私も日々精進しますので、

是非応援していただければ幸いです。

## 一章 杏：親

あまりの眩しさに目が覚めた。

カーテンの隙間から朝日が差し込み、俺の顔をピンポイントで照らしている。

時計を見ると、時計は『6時45分』を示し、目覚まし機能が作動するまで後5分。だが、わざわざ騒音を辺りに撒き散らす機能を作動させてやる義理もない。

俺は、頭上に手を伸ばし、時計の上のスイッチをOFFに切り替えた。これにより朝の静寂は守られた。再び安心して夢の中へ落ちてゆける……

……落ちてゆける……

……落ちて……

……落ちろ……

「って！落ちろよ俺！」思わず大声を上げる、が、当然何も変わらず、再び静寂が寢室を包み込む。妙な孤独を感じ、俺は無言のまま地上の楽園である『布団』からモソモソと抜け出した。

秋も中盤に差し掛かっているだけあって部屋の空気は少し肌寒く、思わず身震いしてしまう。

布団に再び潜り込みたくなるのをここは鉄の意志でグツと堪え、その誘惑の根源である布団をたたみ、即座に押し入れへと始末する！

そして、本日から着用が義務付けられた学生服の上着（通称：学ラ）に、ほぼ一年ぶりに袖を通し、空っぽのバッグを持って2階を後にした。

1階に降りると、そこにはホカホカと湯気を立てる白米と味噌汁が俺を待ち受ける………はずもなく、冷蔵庫から冷たくなった白米を取り出し電子レンジへGO！  
それと同時に、味噌汁の入った鍋を火にかけ、洗顔、髪の毛のセツトをすること数分。

7

味噌汁の鍋がコトコトと美味しそうな匂いを部屋に漂わせながら音をたて、朝食の準備が出来たことを知らせた。

とりあえず軽く朝食を済ませた俺の視界の端で、何かがちかちかと光る。

誰かが俺の寝ている間にメールでも送って来たようで、携帯電話が受信を知らせる青い光を発していた。茶碗をさげながら携帯電話を開く………どうやら2通ほど来ているようだ。

## 1 通目

差出人：たくあん  
件名：起きてるか？

本文：ようやくテストも終わったわけだし、明日の夜はお前ん家でオールナイトパーティー！OK？

1通目は友人からのメール、今夜うちに泊まりに来たいらしい。  
昨日、定期テストが終わったこともあり、俺もたまりにたまった鬱憤をはらすのに良い機会だと思い、すぐに『OK』の返事を返そうかとも思ったが、どうせ今日、この後学校に行けば会えることを思い出し、その時に了承の意を伝えることに決め、先に2通目のメールを読むことにした。

## 2通目

差出人：母さん

件名：ヤッホー 元気〜

本文：突然なんだけど明日お家に帰るから〜  
晩ご飯、私達の方もよろしくね〜 母さんより  
追伸：晩飯はちらし寿司が良い。BYE

「……………!？」

「は!?!?どういうことだよおい!なんでいきなり帰ってくるんだよ!?!?ちらし寿司って何だよ!」

携帯電話に大声で問いかけるが、当然、電話が答えるわけもない。それに、突然のことに頭がついていっていない。

いい機会なので、俺の両親のことを紹介しておこう。

……俺の両親は、青春ブラリ旅と称して世界中を飛び回っている。いつたい何の仕事をしているのか見当も付かないが、時折銀行にお金振り込まれている以上、なにかしら仕事をしているのだろう……そして突然フラツと思いついたように帰ってくる。そんな親なのだ。

そんな気ままな生活をしている両親が、明日帰ってくる！

いや？昨日の明日だから……今日！？

前に帰ってきたのは中学1年生の頃であるからして……ゆづに5年ぶり……

いつたい何の目的だろうか……いつもの通りの気まぐれとはどうも思えない……

夢のこともあるし……これは何かある気がする……

「はあ……たくあんの話は断るか……」

## 一章 壱：親（後書き）

主人公が異世界へ行くのは  
もう少し先になりそうです。

2章ぐらいかな？

## 一章 式・登（前書き）

予定より投稿が遅くなってしまいました。

申し訳ありませんm（――）m

今回は、前回よりは若干読みやすくなっているかと思えます。

少し書き方？を変えてみました。

もし、読みやすくなったと感じて頂けたなら書き方の変更は大成功ですね。

それでは！

## 一章 式：登

『一体何が目的か?』そんなこと、あの馬鹿親二人の場合、いくら考えても分かるわけが無い。

結局、そう判断し、考えることを止めた。

玄関を開けると、  
外はシンとした空気で満ちていて何とも気持ちが良い。

「この時間なら余裕だな…」

俺の通う高校は、やたら辺鄙な所にあり、ほぼ山の頂上付近。

なんでも、初代理事長が山登り好きだったらしい…  
なんともはた迷惑な話である。

バスは、その山の麓までしか出ておらず、そこからは徒歩。  
普通に歩いて50分ほどかかる。

新生生のほとんどが、入学式早々遅刻するというのも、全国探し  
ても、うちぐらいだろう…

まあ、俺もその例にもれずしっかり遅刻したくちだ。

「くそっ！相変わらず険しいな」

バスを降りたのは20分ほど前、なのにも関わらず、いまだ山の中腹付近。

そこら辺に、一年生らしき者達が多く座り込んでいる。

「おい！」

「うん！？」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえて、振り向くと、息を切らせながらこちらへ向かって来る、たくあんの姿。

「おす！」

「よう！今日は早いじゃないか」

たくあんが出会って早々に失礼な事を言う。

「何言ってるんだ、いつも遅刻してくるのはお前だろうっ」

「ありゃ！そうだったか！こりゃ失礼」

そう言つてガハハと笑う。  
相変わらずの三枚目だ。

「そんな事より、今夜、大丈夫か？」

「あー…いや、ちょっと難しいな…」

「何でまた！？珍しいじゃんか！」

たくあんが驚くのも無理はない。

俺の家は、基本的に俺一人しか住んでいないため、何かある場合は、毎回うちに集まっていたのだ。

「いや、俺も遊びたいのは山々なんだけど………」

「じゃあ、いいじゃん」

「それが…そうはいかないんだよ！今夜、親父とお袋が帰ってくるんだ…」

たくあんが、ハツと息を飲む。

「…それは本当か？」

ああ…。そう答える俺の肩に、ポンツと手を置き、たくあんが神妙

な顔をして口を開く。

「お前とは長い付き合いだ、中学の頃からだから、もう5年も経つ……」

「……ああ、そうだな」

もう片方の肩にも手を置き、たくあんは深く息を吐き、首を左右に振る。

「……それでも今日まで！今までありがとう！それじゃ！」

早口でそう言うと

サツと踵を返して、ダッシュで走り去ろうとするたくあん。

しかし、それは俺に簡単に襟を掴まれて失敗に終わる。

「嘘です。ごめんなさい。僕達友達！一生友達！だから、崖に連れて行かないで！」

俺に襟を掴まれ、中ぶらりんのまま、一人で訳の分からない事を喚んでいるバカ。

「おい！バカな事言ってるやないで、さっさと行くぞ！」

俺はそう言つと、襟から手を離しさつさと歩きます。

たくあんは、うちの両親の奇人変人ぶりを知っている数少ない人間だ。逃げたくなる気持ちも分かる。

「それで……今回は何が目的なんだ？」

追いついたたくあんが真面目な顔で問う。

「それが……分からないんだ……」

「何だつて！？それじゃあ対策が立てられないじゃないか！」

驚きの表情を浮かべるたくあん。

「ああ……そうなんだ」

驚きの表情を浮かべたままのたくあんと、疲れた表情を浮かべる俺。

俺達は、どちらともなく大きな溜め息をつくつと、我らが雲海高校の馬鹿でかい門をくぐつた。

## 一章 式・登（後書き）

いまだに主人公の名前が出てきてませんね……

まあ、単純に名前を決めていないというだけなんですけどね（＾o＾）；

次の参まで、現代の描写が続きます。

異世界は？という方、もうしばらくご辛抱下さい。

## 一章 参：部（前書き）

遅くなり申し訳ありません m ( ) m

執筆中のデータの半分が消えるという事故に見舞われ、ヤル気も消えていました。

それではまた後ほど

## 一章 参：部

今日はテストを返却するだけで、授業もないため、昼前にホームルームも終わり既に放課後。

俺とたくあんは再び山を登っていた。

何故また登っているのかというと、別に何ということもない。部活動をするためである。

その部活をするための場所が、これまた初代理事長の趣味だからか知らないが、学校の更の上、山の頂上にあるというだけの事。

そしてそこへ今、俺とたくあんは向かっているというわけだ。

起伏にとんだ山道を登りながら、たくあんが口を開く。

「ホント毎日毎日、上に行くだけで疲れるよな！」

「そうだな。でもまあ足腰が鍛えられていいんじゃないか？」

「そうだけど」

隣から聞こえる約二年間、幾度となく繰り返されたであろう愚痴に、適当に相づちを打ちつつ、一歩一歩、歩を進めてゆく。

そして、十数分後

「ほら！着いたぞ」

「ようやくか！！」

俺の声に顔を上げ、返事をするや男子更衣室に入っていくその姿からは、先ほどまで口から散々撒き散らしていた『疲労』の『ひ』の字も見受けることが出来なかった。

「何が、『上に行くだけで疲れる』だよ…」

思わず溜め息交じりにそう呟くと、俺も着替えるべく、たくあんの後を追った。

更衣室には、一足早くホールムームを終えて来ていたのであろう。部長が既に着替えを終え、部員を待っていた。

「こんにちは、部長。今日は随分早いんですね」

「そうなんだあ 三年生はねえ、定期テストなんてあってないようなものだからねえ」

この、何だか気の抜けるような話し方をする人が、俺達の所属する部活『合気道部』の部長である。

普段はこのように、ふにやふにやしているのだが、ひとたび争いごととなると、無類の強さを発揮する。半年に一度行われる『武道部合同練習試合』においても、必ず3位以内には入る猛者なのだ。

「今日わあ、僕の都合が悪くてえ、あんまり遅くまでは稽古出来ないんだあ、ごめんねえ」

そう申し訳なさそうに言う部長に、俺達はあわてて気にしていないということを伝える。

なぜならこの部長、肉弾戦となると『向かうところ敵無し！』なのだが、舌戦や精神攻撃にはめっぽう弱く、すぐに言い負けてしまう。事実そのせいで、前回の『武道部合同練習試合』では、『口喧嘩部』に敗北し、優勝を逃している。閑話休題。

そんなこんなしているうちに、更衣室には人が集まり始め、それ

ほど広くない更衣室は満員に近付きつつあった。

「部長、もうそろそろ稽古場に移りましょう」

他の部員と話している部長にその声をかけ、俺達は一足早く更衣室を後にし、稽古場へと足を運んだ。

既に陽は沈み、白銀の三日月が辺りをぼんやりと照らすなか。

「部長の嘘つきーーーー!!」

夜の闇にたくあんの花からの叫びがこだまする。

時計の針は既に9時をまわり、俺達の予想していた『あまり遅くまで』が示す時間は疾うに過ぎていた。

確かに、これから山を下りることを考えると叫びたくもなる。

たくあんに一言声をかけ、背を向け歩きだすと、後ろでしばらくギヤールギヤール喚いていたが、疲れたのか黙って歩きだした。

星がチカチカと瞬く夜空の下

消えかけ点滅する外灯の光に照らされながら、足を伸ばしてベンチに座り込む学生が二人。

言わずもかな俺とたくあんである。

9時を過ぎると麓まで来るバスは1時間に一本となり、それを待っているというわけだ。

その後、しばらくすると二本の光の筋が俺達二人を照らすと、ゆっくりと止まった。

「おい、起きろ!」

「ん? ああ……」

俺の隣で香気にいびきをかいていたたくあんを起こすと、ようやく到着したバスに乗り込んだ。

「……………」

「お客さん…お客さん！」

体を揺さぶられて目を覚ます。

どうやら眠っていたようで、運転手が終点で起こしてくれたようだ。幸い俺が降りる停車場も終点なので、この運転手には毎回お世話になっている。

「んっ！ありがとう」

適当にお礼を言いつつバスを降りる。バス停と家は、そう遠く無い。

数分後、俺は家の前に立っていた。

「……居間の電気が付いてる……」

覚悟はしていたがやはり、実際に帰って来ている証を見ると改めてうんざりする。

一度大きく深呼吸して……

いざ、心を決めて玄関の扉を開く。

刹那、何が起きたのか分からなかった。しかし、日頃の稽古のおかげか、扉の隙間から繰り出された拳を紙一重で避け、その勢いを利用し、投げる！

相手は投げられる事を予想していたかのように、クルリと受け身をとるとスツと立ち上がり、指を俺を突き付けた。

「ちらし寿司はどうした!？」

そう言うと同時に再び殴り掛かってくる父。ブンブンと腕を振り回しながら何やら叫んでいる。

「お前っ！はっ！ちらし寿司っ！の！」  
要するに俺が、ちらし寿司を作っていなかったのが気に入らないらしい。

とりあえず、一度大きく後ろに跳び距離をとる。

ちらし寿司に狂った父が、今にも俺に飛び掛かるつかという時。身構える俺の耳元をブンツ！と何かが高速で通過していった。

何事かと、思わず後ろを振り返ってみるも…何も無い。その更に後ろ、父のいる方からカランツという何かの落ちる音がして視線を前に戻すと、地に落ちたフライパンと立ち尽くす父の姿。

その姿がゆっくりと膝から崩れ落ちる。

その直前に、父が発した言葉。それは…

「FLYするフライパンか……」

「……………だじゃれかよorz」

思わず崩れ落ちた。

## 一章 参：部（後書き）

やっと次回！異世界へ行きます。  
ホントに長かった。

あっ……主人公の名前決めなきや

## 一章 四：家（前書き）

ずいぶん期間が空いてしまいました。

申し訳ございません。

これからも不定期更新になるとは思いますが、暖かい目で見守っていただければ幸いです。

でわ

## 一章 四：家

父が母の狂フライパンに沈んで一時間後。

我が家の居間では何事も無かったかのよう夕飯の風景が繰り広げられていた。

メニューはもちろん、ちらし寿司。

これには先ほどまで玄関先のアスファルトと熱いキスをかわしていた父も小踊りして喜んだ。

完成するまでの間、ちゃぶ台の回りをくるくると回りながら踊る父の姿は、誰が見ても異様な光景であったことだろう。

そして、どこかの野菜星の戦闘民族よろしくちらし寿司を平らげた父は今現在、一転して真面目な表情で俺の正面に母と並び座っていた。

「実はお前に大事な話があつてだな……」

そんなことは百も承知な俺は「それで？」とばかりにまばたきを数度して先を促す俺。

それに対して、父はやけにゆっくりと湯呑みを上げて一言、言い放った。

「しかし……説明するの面倒だな」

「はぁ!?!」

驚きも束の間、父は湯呑みをちやぶ台へと音を立てて叩きつけた。

そして、視界は光に包まれた。

## 幕間

いつの事かなど分からない

なぜなら人はそれが起こった事を知らぬのだから

どこの事かなど分からない

なぜなら人はその場所の存在すら知らぬのだから

なぜなのかなど分かるはずもない

なぜなら人はその全てを知らぬのだから

人は己が知っている事しか感じられず、考えられぬ  
思わぬために行動を起こす事も出来ぬ

疑問にも

そのように出来ているのだから

しかし、それは存在する

人の知らぬところに

お前はまだ知らぬ

しかし知る素質は十分だ

ならば教えよう

世界の誰一人として知らぬこの世の真実を！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3854i/>

---

職業、魔王!?

2010年10月20日19時53分発行